第３(1)分科会　施設・設備及び事務に関する課題（合同）
第３(3)分科会　ＰＴＡ及び地域社会に関する課題（合同）

児童・家庭・地域にとって安心で安全な学校づくり

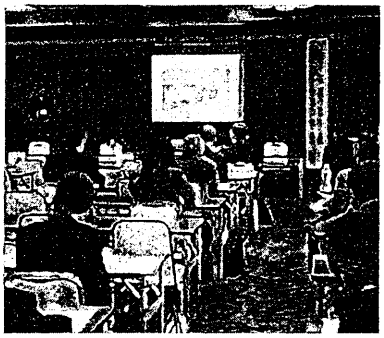
－効果的な学校経営のための副校長のリーダーシップ－

助 言 者　宇都宮市立晃宝小学校長　　鈴木　順二　先生
提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長・教頭会

子どもの豊かな学びを保証する学校・家庭・地域のよりよい連携のあり方

－教頭のかかわりの現状と課題の把握をとおして－

助 言 者　宇都宮市立晃宝小学校長　　鈴木　順二　先生
提言地区　下都賀地区　栃木市小学校教頭会



１　提言趣旨

(1)　宇都宮・上三川地区小学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校を取り巻く環境が大きく変化している今、学校力を高めるために、教育環境の整備を図り円滑な学校経営の推進に努めなければならない。つまり児童・学校・地域にとって安心で安全な学校づくりをすることが重要であり、この課題に正面から取り組む必要がある。以上のことから、よりよい教育環境づくりに必要なことは何かを研究し、副校長がどのようにかかわっていくか追究するために本主題を設定した。

イ　研究の概要

１年次は、各学校を取り巻く環境を含めた実態を調査し、具体策を検証した。さらに、その際に副校長としてのかかわり（関与性）を明確にすることに努めた。実態の把握にあたっては、特に防災非常災害への対応を中心に行った。児童・家庭・地域の危機管理意識の高揚、施設設備の活用保全等も見直し、指導の具体策や実施の方法等を検討した。

ウ　成果と今後の課題

緊急事態発生時の対応や施設整備の活用保全の点で、現状に即した研究を進めることで、児童や教職員の意識が高まり、実践的な場面での対応策が確認できた。

今後は、学校を取り巻く環境にも積極的に働きかけ、地域住民の意識を高めながら学校が果たす役割を具体化し、正確で有効な情報を発信するためにどう対処すべきか研究を深める必要がある。

(2)　下都賀地区小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

子どもの豊かな学びを保証するために、家庭、地域の教育力を活用することは、学習支援や学校環境整備の面で、大きな教育的効果が期待できると考える。その中でも特に「環境整備」に視点をあてて研究をすすめることとした。今年度は、連携における教頭のかかわりの現状を把握し課題を明らかにすることで研究主題に迫るための第一段階としたい。

イ　研究の概要

『子どもの学びに効果的に結びつく連携のあり方についての方向性を示す。』『学校・地域・家庭が「無理なく、楽しく、互いに目的を持って活動できる」ための連携のあり方を探る。』という研究のねらいに迫るために、①環境整備面における取組について各校にアンケート調査を実施することで、現状の把握を行い、②アンケートの結果から連携の成果と課題の明確化を行った。

ウ　成果と今後の課題

「環境整備」に視点をあて研究を進めたことで、家庭・地域との連携をより広い側面から見直せた。アンケート調査を実施し、学校規模別に話し合ったことにより、同様の悩みを抱えていることを共通理解することができた。

明らかになった課題として、活動を継続発展していくために組織的に活動できる学校体制づくりや地域のコーディネーターの存在が必要であること、ＰＴＡ組織を介して地域との連携を推進していく必要がある、等があげられた。

２　グループ協議内容

(1)〔い班〕

○宇・上地区の提言に関して

・中学校２校、小学校４校で３月11日の大震災を想起しながら、災害時の危機管理について話し合う。児童生徒は原則「学校待機」が考えられる。この方針を保護者、地域に周知させることが今後の課題となる。

○下都賀地区の提言に関して

・地域の方が集まり、元々あった集団を活かし、ボランティア活動を行う基礎作りができる。

・地域からの発信を待つだけでなく、学校から地域に出向いて懇談会等を活発に行うことで、地域との交流の活性化に努めることができる。

(2)〔え班〕

○下都賀地区の提言に関して

・ＰＴＡだけでなく、子ども達を地域ぐるみで育てる、という意識付けが大切である。地域からの協力を得られることで可能になることは、大変多い。小中連携の活性化も図れる。

・連絡調整の役割を教頭が担っている学校が多いが、地域との連携においては、教頭の果たす役割が大きい。

・学校支援の方法は、様々考えられる。例えば包丁や草刈り鎌を研いでくれるなどの支援もある。

(3)〔き班〕

○宇・上地区の提言に関して

・震災後、学校内外の巡回を増やし、安全確保に努めている。また、「おやじの会」を中心として、パトロールも実施している学校がある。

・メール配信システムの導入に関しては、地域差がある。安全確保の意味においては、今後導入を検討していくことが必要ではないか。

・施設設備の修繕が、必要になった学校の中には、廃品回収を実施し、資金作りをしたところもある。

○下都賀地区の提言に関して

・地域コーディネーターを中心に、学校と地域が結びついている例が多い。元々ある組織を活かすという意味で、民生委員さんを核にしての地域からの支援づくりをしていくこともできる。地域に明るい民生委員さんの力をかりる事の効果は大きい。

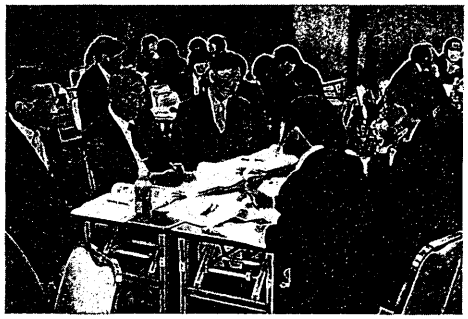
３　指導助言

(1)　宇・上地区の提言について

３月11日以降、施設設備の安全管理がより大切になってきた。学校が災害時の拠点となることも明らかになった。こうした現状を踏まえ、実際に即して教頭のかかわりが具体的にまとめられた発表であった。

危機管理の上で大切なことは「知識」より「意識」、「どれだけ知っている」より「どれだけやる」、「理論」より「実践」である。今やれることからスタートし、実際に動きながら解決策を見つけてほしい。

次年度の研究にあたっては、教頭の関与性「いつ　だれに　どのようにかかわり　どう改善していくか」を視点として、研究をまとめてほしい。



また、多くの学校のデーターを載せ、他校にも生きる研究にしてほしい。

(2)　下都賀地区の提言について

環境整備の観点から、教頭のかかわり方を探っていく、という課題設定が大変よい。学校規模別に課題を整理していく方法は、より実態に即した意見が出されるという点においても有効な手段である。地域と学校の結びつきを強めるには、目標を共有化していくことが大切である。教頭のかかわりとして、両者の間に立ち連携を深めることが重要になってくる。学校作りのビジョンを学校だけが持つのではなく、児童の願い、保護者の願い、地域の願いを織り交ぜながらみんなで練り上げ、作り上げていくことも１つの方法として考えられる。学校の中核として、ミドルリーダーを育てていくことも大切。現場にあって人を育て人を活かしていくことも学校作りには、不可欠である。来年度は、今年度出された課題に対し、解決の糸口が見つかるような研究になっていくことを期待している。

（記録：萩埜　晴代・根本　恭子）

第４Ａ・Ｂ分科会　組織・運営に関する課題（小学校・中学校）

学校の活性化を図るための組織・運営のあり方
－組織活性化に向けた教頭の取組－

助 言 者　宇都宮市立城東小学校長　　村上　雅之　先生
提言地区　那須地区　大田原市大田原地区教頭会

元気な学校づくりをめざした学校組織の活用
－学校組織マネジメントの手法を活かして－

助 言 者　宇都宮市立城東小学校長　　村上　雅之　先生
提言地区　宇河地区　中学校副校長・教頭会

１　提言趣旨

(1)　那須地区大田原市教頭会

ア　主題設定の趣旨

新学習指導要領の趣旨を踏まえた特色ある教育活動を展開するために、現在各学校において日々工夫改善を行っているが、そのためには校長・教頭のリーダーシップの下、学校全体の組織力向上や教職員一人一人の資質向上を図ることがより一層求められている。昨年までの本地区の研究から同僚性や協力体制を高めることで組織が活性化され、充実した教育活動が期待されることが確認された。このことを踏まえ、「組織活性化に向けた教頭の取組」について研究を進めることとした。

イ　研究の概要

研究を進めるにあたり「機能的な学校組織」や「活性化に向けた教頭のかかわり」についてその概念の共通理解を図った。次に組織活性化のために必要な条件を検討し、それらについて市内小中学校の現状と課題を明らかにするためにアンケート調査を実施した。そして、調査結果から組織活性化に向けた取組状況や課題を検討・分析した。

ウ　成果と今後の課題

アンケート調査項目を検討する中で、組織活性化のための観点を明確化することができた。またアンケート結果からは各学校の組織活性化に向けた取組を知ることができた。

課題として、学校評価の活用、小中連携の取組、ミドルリーダーの育成、授業力向上への取組等を通して、学校組織の活性化を図ることが上げられる。

学校の主役である児童生徒の充実した学習活動のために、教頭として学校組織の活性化に向けて努力を継続していかなければならない。

(2)　宇河地区中学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

子どもの学ぶ意欲や学力・体力、家庭や地域の教育力など、今日の教育を取り巻く環境は大きく変化しており、学校が抱える課題も多様化・複雑化し、学校全体での対応がこれまで以上に必要となる。また、学校の教育活動を地域に発信し、特色ある教育課程を編成・運営することが求められている。これらの課題に対応し、特色ある元気な学校づくりをめざしていくために、学校運営に学校組織マネジメントの考えを導入して研究を進めていくこととした。

イ　研究の概要

学校組織に関する調査を実施し、課題の明確化を図った。現在までの組織マネジメントの考えを生かした各学校の取組状況を調査・分析して、そこから今後の研究の手だてを考え実践する。そのために、実態調査・評価部、研究実践部、発表部の研究組織を立ち上げた。「各学校における取組」「学校組織に関する意識調査」から検討分析した。

ウ　成果と今後の課題

組織の活性化と組織力の向上には職員間の人間関係づくりが肝要である、というこれまでの研究成果に基づき、これまで実践を重ねてきたが、今年度は学校組織の活性化について各学校の実践内容を見直す作業を行ってきた。今後も各学校において組織活性化に向けて新たな手立てを考え、それらを継続的に実践するとともに、より一層学校間における情報交換を密にしていきたいと考えている。

2　グループ協議内容

(1)　協議の柱①「学校の活性化を図るためにはどのような組織・運営をすればよいか。」

・ミドルリーダーの意識によって活性化の状況は変わる。（い班）
・教員評価の目標設定の際に、リーダーとしての動きが反映されるような内容があるとよい。（え班）
・若い先生方を育てることが大切。（お班）
・日常的な取組が必要であり、お題目より行動・実践である。（く班）
・がんばっていることが認められる雰囲気作りが大切。（け班）
・教頭は職員が元気になる職員室経営に努めていかねばならない。（け班）

(2)　協議の柱②「学校評価の活用、小中連携、ミドルリーダーの育成、授業力向上への取組として、副校長・教頭はどうかかわればよいか。」

・授業研究会は、略案１枚で実施するとやりやすくなる。（あ班）
・ミドルリーダー育成のためにも、一目で分かる引継がなされるとよい。（あ班）
・ＰＤＣまではできているが、Ａまで行えるようにするのが教頭の仕事である。（う班）
・教頭は何を行うにも、教務と協力して時間の確保をしていかねばならない。（う班）
・取組で生まれる多忙感による不平不満を解消していくのが教頭の仕事である。（う班）
・小中連携では、教頭が調整役として動かなければならない。（え班）

(3)　協議の柱③「各学校で組織マネジメントの手法を活かした取組をしていくとき、教頭としてどうかかわればよいか。」

・校内プロジェクトを立ち上げることで対処している。（あ班）
・週案に反省点のみならず改善点を書いてもらう。80％はほめるコメントを書く。（あ班）
・最初は教頭が一つ一つにかかわり、徐々にまかせられるようにしていくべき。（い班）
・地域との窓口の役割が、教頭としての重要な仕事である（う班）
・ミドルリーダーの育成が重要な課題となる。（お班）
・得意なところを活かして、若くてもやってもらうのがよい。（か班）
・校務分掌はペアチームにして、主になる教員から学べるようにするとよい。（き班）
・適切な組織づくりや方向性を出していくのが教頭の仕事である。（く班）

(4)　協議の柱④「組織の活性化をはかる上で、鍵と考えられる同僚性向上のための教頭のあり方。」

・教頭として、人のつながりをしっかり見ていくことが大切になる。（お班）
・同僚同志では言えない、そういうときに言えるのが教頭である。（か班）
・指導するためには、日頃の人間関係が大切になる。（き班）
・職員室のマナー向上も重要である。礼儀や相手を尊重することも大切である。（き班）
・ミドルリーダーの活用が同僚性向上の鍵であり、その雰囲気づくりが教頭の重要な役目である。（け班）

3　指導助言

①教頭職は、ほんとうは楽しいものである。いろいろな企画をして実行できるからである。
②学校の組織運営については、きちんと方向性を出すことが大切である。
③１年間に学校ができることは、一つか二つである。
④校務分掌については、二人制がよいのかどうかは、学校の実状による。私は責任を持たせるためにも一人一役をすすめる。
⑤教員評価制度は、栃木県にとって良いものであると思う。
⑥校長・教頭は、しっかりとした方針に基づいて学校が動いていくように指導しなければならない。

（記録：片岡　一郎・猪瀬　藤衛）

第５Ａ・Ｂ分科会　教職員の専門性に関する課題（小学校・中学校）

教職員の専門性を高めるための教頭の関与のあり方
－教職員の資質向上のための教頭のかかわり－

助 言 者　宇都宮市立国本中学校長　　白鳥　信義　先生
提言地区　南那須地区　南那須小中学校教頭会

教科経営の質を高めるための教頭のかかわり
－言語活動の充実による学び集団の育成を通して－

助 言 者　宇都宮市立国本中学校長　　白鳥　信義　先生
提言地区　下都賀地区　Ｃブロック中学校教頭会

１　提言趣旨

(1)　南那須地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

新学習指導要領では生きる力の理念を継承し、思考力・判断力・表現力の育成と活用が重視され、とちぎ教育振興ビジョンにおいて求める教師像として具体的に明示された。これらの情勢を踏まえて教職員の専門性を考えたとき、本地区では、専門性を教職員の資質と捉え、教職員の資質を高めるための教頭の関わり方について検証することとした。

イ　研究の概要

教職員の専門性を論ずる中で、コーディネート力をキーワードに研究を推進した。コーディネート力を調整力・仲介力・推進力（実現力）と捉え学校の果たすべき役割が大きく変化してきた現在、教育現場において、コーディネート力を必要とされる場面は従来より増えているのが現状であり、各校の実践を通して以下の視点から検証した。

①教頭がコーディネート力を発揮した事例
②教員のコーディネート力を高めるため、教頭が推進力を発揮した事例

ウ　成果と今後の課題

教職員の専門性の向上に向けて、従来から成果が確認されている現職教育・校内研修の充実、教職員評価制度の効果的活用等に加えて、今回の研究を通じて、各校のリソース（能力・資源）をうまく調達し組み合わせて活用し、多様化するニーズに応える能力、つまりコーディネート力を高めることの重要性を確認することができた。

次年度は、教頭がコーディネート力を高めることはもちろん、教職員のコーディネート力を高めるための、具体的な教頭の取組についての研究を深めていきたい。

(2)　下都賀地区中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

第九期全国統一研究主題に明示された、人間性や創造性を豊かにはぐくむ中心的な場は、中学校教職員にとっては教科指導であり、個々の教師の専門性における質の維持向上が、生徒の確かな学びの保障につながる。

授業の媒体は言語であるから、言語を活用して学ぶ力を充実させていくことが、人間性・創造性を磨くことになると捉え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

今年度は、各教科の目標達成を目指した教科指導において、人間性・創造性の育成が言語活動の充実という点でどのように関わっているかを、教科指導計画や教科の実践例から探るように努め、具体的には次の４点について研究を推進した。

①教育目標実現のための年度重点事項と教科経営の系統性の把握
②教科指導計画における言語活動の位置づけ
③授業における言語活動の充実
④教頭の教科担任への支援状況

ウ　成果と今後の課題

教科経営の重要性を認識し、その精度を上げる機会となり、言語活動の充実を各教科間の共通項として意識したことにより、組織としての協働性が発揮され、生徒の中に相互理解、協調性や寛容な態度、主体性、論理的な表現力が育まれた。同時に、教職員の教育活動へのやりがいや熱意が高まり、専門性や指導力の向上につながった。

豊かな人間性と創造性のある学びの集団育成のため、教科指導者としての専門性を高め、言語活動の活性化と充実を目指して、地域人材の活用・ＩＣＴ活用力の育成等の研究を推進していきたい。

２　グループ協議内容

(1)〔う班〕

○南那須地区の提言に対して

・全教職員にコーディネート力が必要であり、年齢や内容等に応じて具体的に育成していったらよいのではないか。

・学校支援ボランティアへの教頭の対応は、礼状作成まで見取る場合や学年に割り振る場合等があり、学校種やケースによって異なってくる。

○下都賀地区の提言に対して

・中学校において、各教科で言語活動に絞って皆で進めていることはすばらしい。（感想多数）

・小中連携は幅の広いコーディネートであるので、言語活動においても、小中が連携して活躍する場を育てていくことが大切ではないか。

(2)〔き班〕

○南那須地区の提言に対して

・コーディネート力は、調整力・仲介力・推進力の３つだけでよいか。情報収集能力の位置づけはどうなっているのか。

・問題が生じるとすぐに教頭に相談にくるが、一度相手に返し、各教員のマネジメント力を育てることも必要ではないか。

○下都賀地区の提言に対して

・言語活動の充実を図るには、校長の経営ビジョンや学校課題として取り組んでいかないと難しい。

・小中連携による言語活動の充実は、言語活動以前に小中連携が大きなハードルとしてある。

(3)〔け班〕

○南那須地区の提言に対して

・コーディネート力の調整力・仲介力・推進力の要素については定義を明確にした方がよい。

・教頭が窓口となり、後は関係職員に任せて対応させることにより、それぞれの職員の資質を高めていくように配慮することが重要ではないか。

○下都賀地区の提言に対して

・言語活動の充実については、特に中学校では教頭の取組としては難しい。例えば、教科経営への関わりよりも、各主任との連携を密にした組織作り等を重視していく方がよいのではないか。

・各学校の実践例の紹介として、言語活動の充実に視点を当てた授業公開、小中における相互の授業参観、教科の年間指導計画への言語活動の位置づけ等が挙げられた。

３　指導助言

(1)　南那須地区の提言に対して

・学校という職場は、変化を好まない人が多い所かもしれない。新しいことを始めようとすると抵抗があり、それがネックとなることがある。私の教頭時代のうまくいった体験談であるが、理数教育の充実を提案したところすぐには受け入れられなかったが、組織の15～16％の賛同が得られれば物事は動いていくという信念から、やる気のありそうな人一人一人に声をかけて少しずつ説得していった。そしてまず自分でやってみせ、そのうち直接やることを控えて、学年主任、教科主任、研究主任へとアドバイスしながら徐々に離していき職員を育てていった。私は異動したが、その学校は、今でも理数教育が充実している。

(2)　下都賀地区の提言について

・指導力向上への取組は、学校にとって永遠の課題である。最近言われるようになっている同僚性が、その課題解決の基盤になる。現任校では、教科ごとに細々とやっていた授業研究をやめにしてもらって、一人の教員の授業を全員で参観するというスタイルに変えた。お互いの授業を自由に見合う、日常的に同じ学年とか同じ教科の先生方の授業が気楽に見られるような関係を作れることが大切である。企業のコンサルタントの方が言っていたことであるが、職場には職場の感情がある。一番いいのは、そこに居る人が全員生き生き働いている職場なんだそうです。現実には、冷え冷えとした職場、余計なことは一切言わないで干渉し合わない職場、なあなあのぬるま湯に浸って全く進歩のない職場もある。そうならないように、お互いに自由に物が言えて相談できるような関係作りが大切になる。このあたりが管理職の仕事として大きいのかなと常々考えている。

・言語活動の充実については、各教科等の中で取り組んでいくのはもちろんであるが、各学校の生活の中で意図的に重視して取り組んでいくことも大切である。

（記録：玉村　好明・池田　哲夫）

第６Ａ・Ｂ分科会　副校長・教頭の職務に関する課題（小学校・中学校）

学校の危機管理と教頭の職務と役割
－東日本大震災から学ぶ－

助 言 者　上三川町立上三川小学校長　　星　　成雄　先生
提言地区　上都賀地区　小学校教頭会

教職員の資質向上をめざして
－学校の組織力を高める教頭の役割－

助 言 者　上三川町立上三川小学校長　　星　　成雄　先生
提言地区　足利地区　中学校教頭会

１　提言趣旨

(1)　上都賀地区小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校の危機管理は、保健・安全面をはじめ多方面に関わるものであり、どの学校でも普段から万全の備えをしているはずであった。しかし、今回、東日本大震災に直面し、多くの学校で自然災害への備えの不備が明らかになった。そこで、本地区教頭会では、今回の震災を経験して明らかになった問題点を解決するために、教頭としてどのように関わり職責を果たしていくかについて、教頭会として組織的に研究に取り組んでいくこととした。

イ　研究の概要

研究の初年度である今年度は、まず、震災当日の各学校の対応の実態と問題点を把握するためにアンケートを実施した。そして、その結果を考察し、課題の分析を行い、今後起こり得る大地震に備えてどのような対策が必要かを検討していった。その結果、①教職員の判断力の育成②児童生徒の判断力の育成③学校内の体制の確立④家庭・地域・行政との関わりの明確化の４点について、特に力を入れて取り組んでいく必要があると考えるに至った。これらを進めるに当たり、今年度は、各学校が早急に対応すべきことを実践し、報告し合うこととした。

ウ　成果と今後の課題

教頭会として各校の問題点を持ち寄ったことで、様々な観点や考え方で対応策を検討することができ、各学校の実践化への参考とすることができた。また、研究内容を地震発生に対する危機管理に絞ったため、深まりのある研究ができた。一方、震災時の対応に関しては、保護者・地域・外部機関との連携を今後さらに深めていく必要がある。

(2)　足利地区中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校教育目標の具現化を図るためには、教職員の指導力はもちろん、学校の組織力、そして、学校、家庭及び地域社会の相互の連携は欠かせないものである。その中でも、とりわけ、「根っこ」である一人ひとりの教職員の力は重要である。そこで、本地区教頭会では、教職員の資質向上をめざして、教頭としてどうかかわっていったらよいのかを、今まで進めてきた４関与の観点から、自分自身に焦点をあて、日々実践しながら、効果的な関与の在り方を明らかにしていくこととした。

イ　研究の概要

研究のスタートにあたり、自らの姿勢を改めて見直すために、先輩の先生より「足利市の学校における人権教育～信頼関係づくり～」についての講話をお聞きした。その後、教頭の４関与、①知的関与（方向性の指導）、②情的関与（共感的な理解、受容的な態度）、③働的関与（共に働く）、④物的関与（条件整備）について、教職員、保護者、地域とのかかわりの実践例を整理した。

ウ　成果と今後の課題

様々な場面で、教頭が積極的にかかわることによって、「信頼関係づくり」に効果があることが改めて確認された。

今後とも、教職員同士、児童生徒・保護者・地域との信頼関係づくりのため、教頭自身が率先して自らの意識改革を図り、教育改革等に関する知識、企画調整力、リーダーシップ等を向上させ、それぞれの学校において「４関与」を積極的に実践し、学校・保護者・地域の連携協力による学校づくりを進めていきたい。

２　グループ協議内容

(1)〔あ班〕

○上都賀地区の提言に関して

・災害発生時に備え、引き渡しカードを作成し、活用に向けて準備を進めている学校もある。
・避難所開設の際の物資の準備等、学校と地域・行政等が今後さらに連携を図っていく必要がある。
・危機管理を見直す４つの視点は有効であり、どの学校でも実践していく上で参考となる。
・放射能への対応も、学校によっては必要である。
・校務分掌担当者に教頭がいかに関わり危機管理への体制を確立していくかを考えていくとよい。

(2)〔か班〕

○上都賀地区の提言に関して

・校内だけでの避難訓練の計画が多い。様々な場面を想定し、地域と連携した訓練を実施していく必要がある。また、常に見直しを図り、職員や児童の意識を高めていくことが大切である。
・避難時の判断は、それぞれの場合で判断材料が異なるため、的確な判断を下すのは非常に難しい。一人一人の判断力を十分に高めていく必要がある。

(3)〔け班〕

○上都賀地区の提言に関して

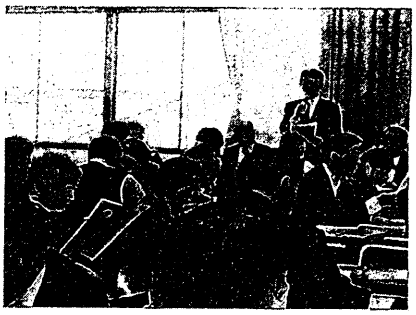
・東日本大震災発生時、マニュアルにない点については、校長のリーダーシップによる的確な判断・指示の下に対応した学校が多い。校長不在でも、的確に判断し動ける教頭でありたい。
・防災無線の整備により連絡がとれた地域もあった。また、震度５以上の地震の対応について市としての方針が定まっている地域もある。地域・行政・関係機関と連携し整備していくべきことについて、今後取り組んでいく必要がある。

○足利地区の提言について

・組織力を高めるための教頭の関わりについて、日頃の業務の確認ができた。
・学校の組織力は、個々の職員の力を発揮することに他ならない。学級づくり・授業づくりが一番大切である。授業の実践と反省の繰り返しで職員が育つ。教頭の参観、助言も大切である。
・信頼関係を築くために、職員同士のコミュニケーション力を高めることも必要である。
・校務分掌業務における起案時に、教頭が助言をし、職員の能力を高めていくとよい。
・校長の方針を意識して実践する職員を育てるのが教頭の役目である。特に責任を持って仕事を行うミドルリーダーを育成したい。
・信頼関係構築の基盤となるのは「子どものために」という意識であり、子どもの目線に立って考えることを忘れてはならない。
・地域協議会や自治会等、学校の協力者と連携する中で、それぞれを尊重しながら学校への協力体制を築いていくとよい。

３　指導助言

〈上都賀地区の提言に関して〉



・現在、各地で危険予測学習（ＫＹＴ）、危険予知トレーニングが始められているが、それらに先駆けた素晴らしい研究である。
・シミュレーションになる実践である。
・自然体験学習の中に防災を組み入れてもよい。
・災害時に求められるものは、優先順位を考えられるリーダー性、連帯性、共同性である。特に、小学校高学年からのリーダー性の育成が求められている。
・学校の災害時における基本的な対応について、市町教委からの通知に合わせて保護者への通知を出すとよい。
・避難の３原則は、「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」である。集団下校訓練の必要性はともかく、危険回避、危機回避能力の育成は重要である。
・校長のリーダーシップに、どうかかわっていくかについてさらなる研究をお願いしたい。

〈足利地区の提言について〉

・教頭としての４関与は興味深い研究である。
・信頼関係を高めるには、コミュニケーション力、コーチング力（相手のやる気を喚起し、目標を達成することをサポートするためのコミュニケーション・スキル）が大切である。
・教職員の親和性を育てるという視点で考えると、能力のある職員に、全職員の前で意見を言わせることは効果的である。（言わせるコーチング）
・学校にユーモアとスマイルがあり、同じ思い、目標を共有している仲間がいることが、組織のモチベーションを高める。

（記録：関根　直子・新井　啓永）

学校支援ボランティアに支えられた教育活動の充実

塩谷町立船生小学校　田　代　昌　子

平成23年４月、旧船生東小学校、船生西小学校、船生小学校の３校が統合して、新生船生小学校が誕生しました。全校生162名の学校です。豊かな自然に恵まれ、船生地区の「おらが学校」的存在で、保護者や地域の方は大変協力的です。

本校では、学校支援ボランティアの方に参加していただく教育活動をたくさん取り入れています。町生涯学習課との連携により、読み聞かせやお話会、戦争の体験談、米作り、焼き芋、箏や茶道などの伝統文化体験などを行っています。その他にも除草などの環境整備や校外学習の付き添い、スキー・スケート指導や持久走大会の補助、登下校の見守り活動など、幅広く様々な分野で、学校支援ボランティアの方の御協力をいただいております。

これらの支援を可能にしているのが、本校独自の「文化・体育後援会」の組織です。ＰＴＡとは別組織で、全ＰＴＡ会員が「学校の教育活動に、自分にできる何らかの支援をしよう」という考え方で、協力してくださっています。保護者だけではなく、地域全戸にも支援希望調査票を配付してボランティアを募集しています。登下校の見守りや読み聞かせに協力していただける地域の方がおり、統合によってＰＴＡ会員が増えたことと相まって、充実した活動を推進することができています。

子どもたちは、いろいろな方から様々な場で学んだりふれあったりする中で、地域への愛着を深め地域の一員としての誇りをもち、豊かな心を育んでいます。文化・体育後援会の趣旨や内容について、保護者や地域の方の理解をさらに深め、活動の活性化を図り、本校の教育活動がより充実していくことを願っています。

地域の公共施設を活用した事業や授業展開

壬生町立壬生小学校　栃　木　康　雄

本校の直ぐ近くには、町中央公民館・町立歴史民俗資料館・町立図書館があるので、これらの公共施設を利用させてもらっています。

中央公民館の大ホールを借りて、毎年、全校児童を対象とした観劇会や音楽鑑賞会を行っています。中央公民館を利用することによって、体育館より環境がとても良いのでゆっくりと鑑賞でき、子どもたちに大変好評です。

町立歴史民俗資料館では、４・５・６年生が次のように活用させてもらっています。

４年生は、天然痘（てんねんとう）の予防接種を広めた医者、日本初の海外留学生、製薬者等のすばらしい功績を残した地元の偉人達について、学芸員の方から話をしてもらっています。

５年生は町の特産である干瓢を、町の農務課職員や干瓢問屋の方々の指導のもと栽培し、学芸員からは干瓢についての歴史・調理の仕方・剥（む）き方等を教えてもらい、自分で剥いた分を持ち帰り家で調理をして食べたり、学校給食で食べたりしています。

６年生は、町内の古墳から出土した本物の土器を見せてもらったり、地元の出来事等を話題にした出前授業をしてもらっています。

最後に、町立図書館は学校の図書室よりもたくさんの書籍があり、調べ学習やより子どもたちの興味にあった本を借りることが出来るので、４年生以上の学年で利用させてもらっています。

よき伝統に感謝と新たなスタート

上都賀地区小中学校教頭会長　星　野　一　行

上都賀地区小中学校教頭会は、日光市・鹿沼市・西方町の教頭82名（小学校55校・中学校26校）で組織され、学校教育の充実推進と会員相互の資質の向上をはかることを目的としています。

全体での研修会を年に３回開催しています。本年度の主な活動は、１回目は「新年度に当たって」、２回目は「震災等への危機管理」、３回目は「上都賀地区学校教育の現状と課題」として、それぞれのテーマごとに上都賀教育事務所、大学等から講師を招いて実施しました。また、３回目の研修会では、小中別・小グループでの分科会を設け、協議題を小学校は「危機管理における教頭の役割」、中学校は「特色ある学校づくりにおける教頭の役割」とし、各学校での実践した取り組みをもとに協議を行いました。

上都賀地区小中学校教頭会の本年度の研究内容は、第九期研究主題と本地区の地区別課題である「副校長・教頭の職務に関する課題」(小学校)、「教育課程に関する課題」(中学校)を受け、さらに各学校で具体的に取り組めるように、研究主題を小学校は「学校の危機管理と教頭の職務と役割」～東日本大震災から学ぶ～、中学校は「『生きる力』をはぐくむ学校をめざして」～特色ある教育課程の実践をめざして～としました。そして、研究の途中ではありましたが、県教頭会第49回研究大会の分科会において、上都賀地区として研究実践の取り組みをまとめ、発表することができました。

しかし、このような２市１町での組織的活動が最後の年となりました。平成23年10月１日に西方町が栃木市と合併をしました。そのため、平成23年度は、地区教頭会として、組織、研修等の見直しを図り、新たな態勢でスタートを迎えた１年目でもありました。長い間共に研修会を実施した経緯もあり寂しいものがありますが、改めて、上都賀地区小中学校教頭会のよき伝統に感謝します。

日々前進、足利地区小中学校教頭会

足利地区小中学校教頭会長　石　井　萬壽夫

足利市小中学校教頭会は、市内の小学校22校、中学校11校の教頭33名で組織されています。「会員相互の研修を行うとともに、あわせて親睦を図ることを目的」として、３つの専門部（研修部、調査部、厚生部）を置き活動をしています。

本年度は、全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」、関ブロにおける足利市の分科会課題「副校長・教頭の職務に関する課題」を受け、「教職員の資質向上をめざして」をテーマに「学校の組織力を高める教頭の役割」について現在までに４回の研修会を実施してきました。

教職員の資質をどう向上させるか、学校の組織力をいかに高めるか、そのために教頭はどうするするべきか、研究のスタートとして、元足利市教育委員会教育長の吉田哲也先生をお招きして、「足利市の学校における人権教育」を基盤にした教職員の信頼関係づくりをテーマにお話をいただきました。お話の中で、足利市教頭会が以前より取り組んでいる４関与（知的関与・物的関与・働的関与・情的関与)、中でも働的関与（共に働く）と情的関与（共感的な理解）が特に信頼関係づくりでは大切であり、信頼関係でこそ教育は進んでいくことを教えていただきました。

今後とも教頭会として研修を充実させ、足利市の教育の振興に尽力していきたいと思っています。

ひ　ろ　ば

日本人の強さにつながる

宇都宮市立一条中学校　持　田　光　世

「自然の脅威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。（略）しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きることが、これからの私たちの使命です。」

これは、東日本大震災の11日後に行われた宮城県気仙沼市立階上（はしかみ）中学校の卒業式で、生徒会長の梶原裕太さんが読んだ答辞の中の一節です。涙で声を詰まらせながらも最後まで読み上げた梶原さん、その映像を夜のニュースで見たとき、私は大きな衝撃を受けました。あのような過酷な状況下でも「天を恨まず」と言い切った気高さ。悲しみに打ちひしがれるのではなく、それを乗り越えていこうとするたくましさ。厳しい自然の中で忍耐強く生きてきた東北人の不屈の魂を見たように思いました。

「天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きる」と誓った中学生の決意を支えていくのが、私たち大人の使命だと思います。そのために、震災を忘れず、復興のために自分が出来ることを考え実行していこうと思います。そして、苦難の度に立ち上がり、心を一つにしてその前よりもよりよい世の中を作ろうと努力してきたことが日本人の強さであることを思い起こし、その一人としてつながりたいと思います。

菊づくりに思う

大田原市立奥沢小学校　塚　田　英　二

本校では、昨年度、５年生の子どもたちが「大菊の三本仕立」に取り組んだ。素人である私も見様見真似で一から学んだわけだが、菊作りは子どもを育てることに相通じるものがあるようだ。

菊づくりは土作りから始まる。腐葉土、鹿沼土、薫炭、もみ殻などを成長に合わせ配合し、根が十分に成長できる環境を整えるのである。土ができると「さい床」「さし芽」「小鉢上げ」と作業が進むわけだが、その過程で根を十分に成長させるために、あえて水を最低限に抑える。甘やかすことなく、根の成長をじっと見守るのである。少ない水分という厳しい環境の中で菊は懸命にその根を張り巡らす。十分に根を張った菊は、養分をたっぷり吸収することができるというわけだ。そして、「摘芯」へと作業が進む。摘芯では、ピンセットを使い「やなぎ芽」を摘む。この作業では、ちょっとした失敗で今までの苦労が水の泡となる。その後、毎日決まった時間にたっぷり水を与えなければならない。このような地道で丹念な作業を経てはじめて見事な花を咲かせるのである。

子どもを育てる上でも、心と体を育む環境、厳しさと見守る姿勢は大切な要素であろう。子どもたち一人一人が自分らしい花を咲かすことができるよう日々努力したい。

耳障りなシンドローム

那珂川町立小川小学校　小　室　功　一

「定刻です。研修会を始めさせていただきます。私は今日の進行役を務めさせていただきます○○です。」と研修会が始まった。〈社員の教育に力を入れない会社が増え、正しい言葉遣いが教えられる大人も減って、若者は「させていただく」を付ければ丁寧なのだと勘違いしている〉という意見を思い出した。

この間違った敬語の多用を「させていただく症候群」と呼ぶそうだ。先のような進行役なら「です・ます」の丁寧語を用いればよいのであって、謙譲の意を込めたような言い方は、誤りで不適切だと言ってよい。〈謙遜を美徳とする日本人には好まれる〉とする人もいるようだが、それは言葉の乱れを招いていて困った現象だ。

「させていただく」の頻用がシンドロームと呼ばれるのは、出現度数だけではなく、本来の使用条件を不理解で使用するからだ。受け手に「あなたたちが大勢の人に集まってほしいというから出席しただけで、どんな内容かはあまり期待していないよ。進行役も私がお願いした訳でもない。」というような心持ちを起こさせがちだからだ。

私たちはいろいろな症候群の中で生きている。それにしても、様々な敬語の誤用は、話し手の「心」の有り様に起因しているのだと思う。

編集後記

東日本大震災から、１年近くが過ぎようとしています。被災された学校には、心よりお見舞いを申し上げます。教頭先生・副校長先生方におかれましても、放射線量の測定等、対応にお忙しい日々を送られていることと思います。

県教頭会も来年度は、50周年を迎え節目の年となります。会報に掲載されている研究大会分科会報告は、普段私たちの抱えている課題の改善策が示されています。ご一読いただき、一助となれば幸いです。改めてお忙しい中、会報作成にあたり原稿の執筆等のご協力をいただきました皆様に心より深く感謝いたします。　（宇野）